

ヨリ朝鮮内政改革ノ事業ハ全ク日韓兩國間ノ事業トナレ  
リ朝鮮内政改革ノ第一期ハ茲ニ之ヲ終了シ今後ノ成績如  
何ハ他ノ章ニ於テ之ヲ叙述スヘシ

第七章 歐米各國ノ干渉

朝鮮ニ於テ東學黨ノ起リシ始ニ方リテハ歐米各國ノ政府  
ハ之ニ對シ格別ノ注意ヲ惹カサリシモノ、如シ現ニ大島  
公使歸任ノ頃在東京露國公使「ヒトロツチ」ハ余ニ對シテ  
近頃頻ニ日本ヨリ軍隊ヲ派出スルノ趣ヲ聞ク知ラス敵ハ  
果シテ何方ニ在ルヤト問ヒシ事アリ是レ固ヨリ一場ノ戲  
言ニ托シテ暗ニ我政府ノ底意ヲ探ラムトシタルモノナレ  
トモ左リトテ之ヲ重大ナル事トシテ考ヘタルモノ、如ク  
ニハ見エサリシ然ルニ其後日清兩國カ歐米各國ニテ嘗テ  
豫想セシヨリモ夥多ノ軍隊ヲ續々韓地ニ派出スルヲ見聞  
シ又前ニ述ヘタル如ク當時在朝鮮ノ歐米官吏及商民等カ  
非常ニ驚愕シ且ツ彼等ハ秘メヨリ日本ニ對シ餘リ同情ヲ

抱カス種々虛實混合ノ意見ヲ各其政府又ハ郷土ニ報告セ  
シモノカ此頃彼地ニ達シ歐米各國ノ政府カ漸ク其眼孔ヲ  
朝鮮ノ内亂殊ニ日清兩國紛議ノ上ニ轉シ來リタルノ際一  
方ヨリハ恰モ清韓兩國ノ政府カ若ニ歐米各國ノ援助ヲ要  
求シタルアリ其結果トシテ六月中旬ノ頃ヨリ歐米ノ政府  
ハ始メテ我國ニ向ヒ干渉ノ端緒ヲ顯シ來レリ

露國ノ勸告

我國ニ對スル干渉ノ端緒ハ露國ヨリ啓カレタリ聞ク所ニ  
據レハ其頃北京駐劄ノ露國公使伯爵「カシニ」ハ方ニ本國  
政府ノ許可ヲ得テ歸國ノ途ニ就キ天津ニ來リタル時李鴻  
章ハ同公使ニ依頼スルニ露國政府カ日清兩國ノ間ニ立チ  
現今ノ紛議ヲ調停セムコトヲ以テシタリ露國公使ハ無論  
之ヲ本國ニ報告シ其指揮ヲ乞ヒ露國政府ハ此ノ機ニ乘シ  
清國ノ歡心ヲ獲ムト勉メタルナルヘシ即チ一面ニハ「カシ  
ニ」伯爵ヲシテ天津ニ滞在シテ李鴻章ト談判セシメ他ノ

李鴻章ト「カシニ」  
伯爵トノ談判

右ニ對スル我政府ノ回答

一面ニハ在東京同國公使「ヒトロツァ」ニ訓令シテ我政府ニ勸告スル所アラシメタリ即チ六月廿五日「ヒトロツァ」ハ余ニ面會ヲ乞ヒ本國政府ノ訓令ナリト稱シ清國政府ハ日清事件ニ關シ露國ノ調停ヲ求メ露國政府ハ日清兩國ノ紛議速ニ平和ニ歸セムコトヲ希望スルニ依リ若シ清國ニシテ朝鮮派出ノ軍隊ヲ撤去セハ日本政府モ均シク其軍隊ヲ該國ヨリ撤去スルコトニ同意セラルヘキヤト質問セリ余ハ之ニ答ヘ其議ハ大体ニ於テ異議ナキカ如シト雖モ如今兩國對峙シテ彼此互ニ猜疑ノ念ヲ抱キ居ルノ時ニ於テ釋然之ヲ氷解スルハ頗ル難事ニ屬ス而シテ斯ル事情ノ存スルハ日清兩國ニ於テ然ルノミナラス歐洲強國ノ間ニ於テモ亦往々免レサル所ナリ加之清國カ從來陰險ノ手段ヲ以テ朝鮮ノ内事ニ干涉シ表裏反覆ノ術策ヲ施シ毎ニ日韓兩國ヲ欺瞞シタルノ事例甚々多キヲ以テ今我政府カ容易ニ清國ノ言行ニ信據スル能ハスト云フモ全ク根柢ナキ

猜疑ニ非ス故ニ若シ清國政府カ(一)朝鮮ノ内政改革ヲ完結スルマテ日清兩國相共ニ之ヲ擔任スルコトニ同意スルカ(二)若シ清國ニシテ何等ノ理由ニ拘ラス朝鮮ノ改革ニ關シ日本ト協同スルヲ欲セサレハ日本政府カ獨力之ヲ實行スルニ當リ該政府ハ直接ニモ間接ニモ之ヲ妨害セサルカ執レカ一方ノ保證ヲ與ヘタル上其軍隊ヲ撤去スルニ至ラハ日本政府モ亦其軍隊ヲ撤去スヘシト云ヒ尙ホ語ヲ繼キ然レトモ余ハ茲ニ露國公使ニ向ヒ左ノ二事ヲ証言スルニ躊躇セサルヘシ(甲)日本政府ハ朝鮮ノ獨立ト平和トヲ確立セシメムト希望スルノ外決シテ他意ナキコト(乙)將來清國政府カ如何ナル舉動アルモ日本政府ハ攻撃的ニ交戦ヲ挑マサルヘシ若シ不幸ニシテ此後日清兩國ノ間ニ戰ヲ交ヘサルヲ得サル場合アリトスルモ日本ハ防禦的ノ地位ニ在ルヘキコト是ナリト云ヒタリ然ルニ同月三十日ニ至リ露國公使ハ復其政府ノ訓令ナリト稱シ一箇ノ公文ヲ携ヘ來リ

露國政府ヨリ日清  
兩國ノ軍隊ヲ均シ  
ク撤去スヘシトノ  
勸告

余ニ手交セリ其概要ハ朝鮮政府ハ同國ノ内亂既ニ鎮定シ  
タル旨公然同國駐在ノ各國使臣ニ告ケ又日清兩國ノ兵ヲ  
均ク撤去セシムルコトニ付キ該使臣等ノ援助ヲ求メタリ  
因テ露國政府ハ日本政府ニ向ヒ朝鮮ノ請求ヲ容レラレム  
コトヲ勸告ス若シ日本政府カ清國政府ト同時ニ其軍隊ヲ  
撤去スルヲ拒マルハニ於テハ日本政府ハ自ラ重大ナル責  
ニ任セラルヘキコトヲ忠告ス下云フニ在リ露國政府カ斯  
ク嚴厲ナル公文ヲ發送シ來リタル心底ハ如何素ヨリ容易  
ニ其淺深ヲ測ルヘカラス而シテ日本政府ハ何等ノ理由ヲ  
問ハス今事端ヲ局外ニ滋クスルハ決シテ得策ニ非サルヲ  
十分熟知シ居リシト雖モ退テ内ニ顧ミレハ當時ノ事態已  
ニ大ニ局面ヲ變化推進シ假令清國カ朝鮮ヨリ其軍隊ヲ撤  
去スルコトアリトスルモ我ハ何ノ爲ス所モナクシテ我軍  
ヲ撤去スルヲ難シトスルノ事情アリ余ハ此兩難ヲ排スル  
ニ就キ頗ル商量ヲ費シ胸底畧最後ノ判斷ヲ定メタレトモ

七十

伊藤總理ハ果シテ如何ニ之ヲ考慮スルヤヲ知ラス故ニ余  
ハ露國公使ト別レタル後直ニ伊藤總理ヲ伊皿子ノ私邸ニ  
訪ヒ默然一言ヲ發セス先ツ露國公使ノ公文ヲ示シ其意見  
如何ヲ聽カムト乞ヘリ同總理ハ一讀ノ下沈思良久シクシ  
テ後餘カニ口ヲ開キ吾人ハ今ニ及ヒ如何ニシテ露國ノ指  
教ニ應シ我軍隊ヲ朝鮮ヨリ撤去シ得ヘキヤト確言セリ余  
ハ此言ヲ聽キ尊意正ニ鄙見ニ符合ス將來事局ノ艱易ハ一  
ニ吾儕二人ノ責任ニ屬ス亦多言ヲ嬰セスト云ヒ勿々辭去  
シ即夜在露國公使西德二郎ニ急電シ露國ノ勸告ニ對シ如  
何回答スヘキヤハ未タ閣議ヲ經サレトモ余ト伊藤伯トハ  
今日露國ノ指教ニ應シ我軍隊ヲ朝鮮ヨリ撤去スヘキ時機  
ニ非ストノ意見ナリト言ヒ送リ又或ハ向後英國ヲシテ露  
國ヲ牽制セシメムトスルニハ彼國ヨリ先入爲主ノ說ヲ注  
入セサル以前ニ窃ニ英國政府ニ我意向ヲ洩示シ置クコト  
肝要ナリト思ヒタルカ故ニ在英國公使青木子爵ニモ西公

七十二



使ニ發シタルト同様ノ電訓ヲ發シタリ嗚呼余ハ今ニ於テ當時ノ事情ヲ追想スルモ猶ホ悚然膚ニ粟スルノ感ナキ能ハサルナリ蓋シ當時伊藤ト余トノ晤談ハ實ニ兩言ニシテ定マレリ默諾ノ間彼此意見ノ同シキヲ見タリ然レトモ試ニ思ヘ若シ當時余ト伊藤トノ意見相異ナルカ或ハ其意見ヲ異ニセサルモ若シ彼此共ニ反對ノ方向ニ判斷ヲ下シタリトセハ當時ノ事局如何ニ變轉シタルヘキ乎今日我國カ世界ニ誇耀スル勳績光榮ハ尙ホ之ヲ得タルヘシトスル乎余ト伊藤總理トノ意見正ニ符合シタリ余ハ片時モ機會ヲ失ハサラムコトヲ欲シ既ニ英露兩國駐劄公使ニ相當ノ電訓ヲ發シ翌日即チ七月一日ヲ以テ露國政府ニ對スル回答案ヲ草シ關係ト協議シタル上 聖裁ヲ仰キ翌二日ヲ以テ之ヲ露國公使ニ送致セリ其概要ハ露國特命全權公使ノ送致セラレタル公文ハ事体頗ル緊要ナルニ依リ帝國政府ハ篤ト熟閱シタリ然ルニ右公文中ニ朝鮮政府ハ同國ノ内亂

七十二

右ニ對スル我政府ノ回答

既ニ鎮定シタル旨ヲ同國駐在ノ各國使臣ニ通告シタリトアレトモ帝國政府カ最近ニ接受セル報告ニ據レハ今回朝鮮ノ事變ヲ釀成シタルノ根因未タ芟除セサルノミナラス現ニ日本兵隊ヲ派遣スルニ至ラシメタル内亂スラモ尙ホ未タ其跡ヲ絶タサルモノ、如シ抑帝國政府カ該國ニ軍隊ヲ派出セシハ實ニ現在ノ形勢ニ對シ已ムヲ得サルモノニシテ決シテ疆土侵畧ノ意ヲ有スルモノニ非ス故ニ若シ該國ノ内亂全ク平穩ニ復シ將來何等危懼ナキニ至レハ其軍隊ヲ該國ヨリ撤去スヘキハ勿論ナルコトヲ露國特命全權公使ニ明言スルヲ憚ラス帝國政府ハ茲ニ露國政府カ友厚ナル勸告ニ對シ篤ク謝意ヲ表スルト同時ニ幸ニ兩國政府間ニ現存スル信義ト交誼トニ因リ其明言スル所ニ就キ露國政府カ充分ニ信據ヲ置カレムコトヲ希望スルナリトノ意ヲ以テセリ此回答ハ外形ニ於テ毫モ圭角ヲ露サ、レトモ畢竟外交的筆法ヲ以テ婉曲ニ露國政府ノ勸告ヲ拒絕シ

七十二

日本政府ノ回答ニ  
對シ露國政府ヨリ  
ノ公文

タルモノナレハ露國政府カ果シテ之ニ満足スヘキヤ否ハ  
更ニ待ツ所ナカルヘカラス然ルニ七月十三日ニ至リ露國  
公使ハ右ノ回答ニ對シ更ニ余ニ書面ヲ送レリ其概要ハ露  
國皇帝陛下ハ日本皇帝陛下ノ政府ノ宣言中ニ於テ朝鮮ニ  
對シテ侵畧ノ意ナク且ツ該國ノ内亂全ク平穩ニ復シ禍亂  
再發ノ虞ナキニ至レハ速ニ其軍隊ヲ該國ヨリ撤去スヘシ  
トノ意思ナルヲ認メ大ニ満足セリ但シ此上ハ日清兩國政  
府ノ間速ニ協議ヲ開キ平和ノ局ヲ一日モ早く結ハレムコ  
トヲ切望ス而シテ露國皇帝陛下ノ政府ハ其鄰國タルノ故  
ヲ以テ朝鮮國ノ事變ハ之ヲ傍觀スル能ハスト雖モ今日ノ  
場合ハ全ク日清兩國ノ葛藤ヲ豫防セムドスルノ希望ニ出  
テタルモノナルコトヲ了解セラレタシトノ意ナリ此露國  
政府ノ公文モ均シク外交的文書ナルカ故ニ一見甚々清穩  
ナル如クナレトモ日本政府ノ宣言中ニ於テ朝鮮ニ對シ侵  
畧ノ意ナク且ツ該國ノ内亂全ク平穩ニ復シ變亂再發ノ虞

七十四

露國政府ヨリ日本  
帝國カ朝鮮ニ對ス  
ル要求中荷モ朝鮮  
國ト列國トノ間ニ  
締結シタル條約ニ  
違背スル條件アル  
トシテ之ヲ有効ハ  
スルト認ムル能ハ  
ストノ注意

ナキニ至ラハ速ニ軍隊ヲ撤去スヘシトノ意思ヲ認メタル  
ニ由リ大ニ満足セリト云フハ因テ以テ日本政府ヲシテ其  
明言シタル範圍ノ外ニ逸出セシムルヲ肯セサルノ意ヲ示  
スモノナリ又露國政府ハ其鄰國タルノ故ヲ以テ朝鮮ノ事  
變ハ之ヲ傍觀スル能ハスト云ヒ以テ暗ニ朝鮮國內ノ事ニ  
就テハ尙ホ何時モ容喙シ得ルノ地步ヲ占ムルモノ、如ク  
其意底尙ホ測知スヘカラサレトモ余ハ兎モ角モ露國政府  
カ一旦言出シタル故障ヲ暫時タリトモ之ヲ撤回シタルニ  
由リ稍安堵ノ思ヲナシタリ然レトモ露國ハ今後日清兩國  
ノ葛藤ニ關シテ朝鮮ノ内事ニ就テ決シテ始終沈黙スヘ  
キモノニ非スト推量シ居タルニ果シテ七月廿一日ヲ以テ  
同公使ハ復本國政府ノ訓令ナリト稱シ余ニ一ノ公文ヲ送  
致セリ其概要ハ日本カ今朝鮮ニ對シ要求セラル、讓與ハ  
果シテ如何ナルモノナルヤ且ツ其讓與ノ如何ナルモノタ  
ルニ拘ラス苟モ朝鮮國カ獨立政府トシテ列國ト締結シタ

七十五

ル條約ト背馳スルモノナルトキハ露國政府ハ決シテ之ヲ  
有効ノモノト認ムル能ハス將來無要ノ紛議ヲ避ケムカ爲  
メニ茲ニ友誼上再ヒ之ヲ日本政府ニ告ケ其注意ヲ促シ置  
ク「トノ意ナリ是レ恰モ前書ニ云ヘル朝鮮國ニ於ケル事變  
ハ之ヲ傍觀スル能ハストノ言分ニ對シ注解ヲ加ヘ嚴ニ其  
意味ヲ確定シタルモノナリ而シテ露國カ此公文ヲ送致シ  
タル後程ナク口清兩國ノ平和破裂シ海陸ノ戰爭相接シ第  
三者タル列國ハ容易ニ其間ニ容吻スルノ機ヲ得サルコト  
ナリ露國モ亦他ノ列國ト同シク暫ク傍觀ノ地位ニ立チ  
タリ然レトモ彼ハ常ニ其眼孔ヲ銳ニシテ日清交戦ノ成行  
ニ注意シ苟モ自己ノ利益ヲ計ルヘキ機會ヲ見出サムコト  
ヲ怠ラサリシハ其後在露國西公使ノ報告ニ由ルモ亦「ヒト  
ロソチ」カ時々余ト面會スルニ方リ種々ノ質問的談話ニ  
涉リシ所ニ由ルモ毫末モ其執念深キ初志ヲ變セサリシハ  
歴歴徴スヘキモノアリ即チ下ノ關係約訂結ノ瞬間ニ於テ

露國カ劈頭ニ干涉ノ張本人トナリテ獨佛二國ヲ誘伴シ來  
リタルハ決シテ偶然一時ノ事ニ非サルヲ知ルヘシ

英國ノ仲裁

朝鮮事件ノ始ニ方リ英國ノ舉動ハ何トナク清國ニ同情ヲ  
表シ居タルカ如ク見エ自然我國民ノ厭惡スル所タルヲ免  
レサリシ然レトモ具サニ其内情ヲ觀察スレハ英國ハ今ヤ  
將ニ極東ノ兩大國カ交戦スルニ至ラムトスルヲ視テ其結  
果ノ遂ニ自家ノ政畧上及通商上ノ利害ニ巨大ノ影響ヲ及  
ホスヘキヲ知リ且ツ從來歴史的關係上ヨリ自ラ清國ヲ重  
視セサルヲ得サル傾向ヲ生スルハ亦已ムヲ得サルノ次第  
ナルヘシ加之英國モ亦初メニハ他ノ傍觀者ト均シク最後  
ノ勝利ハ清國ニ歸スヘシトノ臆測ヲ抱キ居タルニ相違ナ  
シ故ニ日清開戦ノ前後ニ於テ彼ノ東洋艦隊司令長官「ブリ  
ーマントル」ノ舉動ノ如キ往々怪訝スヘキコト少カラサリ  
シ是レ全ク彼カ有心的運動ニ出テタルニ非ストハ今更辯

北京駐劄英國特命  
全權公使「オコン  
ナル」ト總理衙門  
トノ協議

疏シ得サルモノアルヘシ去リナカラ之ニ因テ英國ハ我國  
ニ對シ惡感ヲ抱キ敵意ヲ有シ居タリト云フハ亦早計ノ謂  
アルヲ免レス兎ニ角英國ハ徹頭徹尾何等ノ原由ヲ問ハス  
東洋ノ平和ヲ擾亂セサルコトヲ切望シ居タルモノ、如シ  
北京駐劄英國特命全權公使「オコンナル」ハ機敏ノ外交家タ  
ルコトハ近來英國政府カ累ニ彼ヲ重用スルヲ視テモ証ス  
ルニ足ル彼ハ今天津ニ於ケル李鴻章ト「カシニ」伯爵トノ  
關係ヲ窺知シテ雲烟過眼ノ觀ヲ爲シ自國ノ利益ト名譽ト  
ヲ顧サル如キ迂者ニ非ス彼ハ直ニ總理衙門王大臣ニ向ヒ  
日清兩國ノ間速ニ平和的協議ヲ遂ケ最後ノ衝突ヲ避クル  
ノ得策タルコトヲ勸告シタリ然レトモ當時總理衙門ハ篤  
ク李鴻章ト露國公使トノ間ニ於ケル談合ノ成功ニ倚信シ  
居タル際ナレハ英國公使ノ忠告ニハ餘リ耳ヲ傾ケタル様  
子ニ見エサリシモ當時恰モ清國政府ノ部内ニ非戰論ヲ主  
張シ從テ李鴻章ヲ非議スルモノ群起シタルニ依リ總理衙

英國ノ仲裁

門ハ兎ニ角英國公使ノ忠告ニ從ヒ李鴻章カ大兵ヲ朝鮮ニ  
續發セムト乞フノ建議ヲ一時見合スコト、爲シ竟ニ英國  
公使ヲ經テ再ヒ我國ト平和ノ商議ヲ開カムトスルノ氣色  
ヲ示シタリ英國公使ハ其機ヲ失ハス在日本英國臨時代理  
公使「バゼット」ト數回電信往復ノ後同臨時代理公使ヲシテ  
我政府ニ向ヒ清國政府ハ嘗テ日本政府ヨリ申込ミタル提  
案ニ對シ或ル條件ヲ附シ再ヒ商議セムト欲スルノ意アレ  
ハ之ニ對シ日本政府ノ諾否ヲ聞カムコトヲ欲ストノコト  
ヲ申込マシメタリ因テ余ハ屢「バゼット」ト會談シタル上余  
ハ清國政府ノ提議ハ果シテ其誠意ニ出ツルヤ否ヤニ疑ナ  
キ能ハサレトモ日本政府ハ決シテ好ムテ平和ヲ擾亂セム  
ト欲スルモノニ非ス倘シ清國政府ニシテ朝鮮ノ内政改革  
ノ爲メ日清兩國ヨリ共同委員ヲ派出スルコトヲ承諾シ且  
ツ其主義ニ基キ彼國ヨリ先ツ提議ヲ爲スニ於テハ我政府  
ハ再ヒ之ト商議ヲ開クヲ拒マサルヘシト述ヘタリ因テ「バ

「オコンナル」ハ直ニ余カ答辭ヲ「オコンナル」ニ電照シタリ  
中周旋ニ依リ小村代理公使總理衙門ニ赴キタルモ清國政府ハ何等ノ新案ヲ提出セズ

セツトハ直ニ余カ答辭ヲ「オコンナル」ニ電照シタリ  
「オコンナル」ハ此電信ヲ得ルヤ一面ニハ總理衙門王大臣ニ  
慈憑シ他ノ一面ニハ小村臨時代理公使ト協議シ百方居中  
周旋ノ勞ヲ執リタル後總理衙門王大臣ハ同公使ニ對シ某  
日ナ期シ日本公使ト總理衙門ニ會合シ清國提議ノ基礎ヲ  
商議スヘント約シタリ同公使ハ直ニ此事ヲ小村臨時代理  
公使ニ通シタルニ由リ小村ハ期日ニ至リ總理衙門ニ赴キ  
先ツ彼等カ言ハムト欲スル所ヲ聞カムトシタリ然ルニ彼  
等ハ何等ノ新案ヲ提起セサルノミナラス單ニ清國政府ハ  
日本カ其軍隊ヲ朝鮮ヨリ撤去スルノ後ニ非サレハ何等ノ  
提議ヲ爲ス能ハスト云フニ止リ一モ要領ヲ得ス小村ハ此  
意外ナル言語ヲ聞キタレトモ彼等ト辯論スルノ無益ナル  
ヲ察シ歸途同公使ニ面晤シ總理衙門ノ違約ヲ詰リタルニ  
同公使モ喫驚一番シ此上ハ最早他日ノ機會ヲ俟ツノ外ナ  
シト云ヘリトノ旨ヲ具サニ余ニ電稟シタリ余ハ當初ヨリ

帝國政府ハ小村代理公使ニ電訓シ清國ニ對スル日本政府ノ第二次絶交書ヲ宣言セシム

清國ノ誠意ヲ疑ヒタレトモ何ノ理由モナク英國公使ノ仲  
裁ヲ峻拒スルノ妥當ナラサルカ爲メ姑ク其成行如何ヲ冷  
視シ居タルコトナレハ此仲裁ノ失敗ハ寧ロ我國將來ノ行  
動上漸ク自由ヲ得タルヲ喜ヒ且ツ近日朝鮮ニ於ケル事局  
ハ日清兩國カ商議ノ爲メニ徒ニ日月ヲ遷延スル能ハサル  
程ニ切迫シ居タレハ此機ニ乘シ一旦清國トノ關係ヲ斷ツ  
ノ得策ナルヲ信シ内閣同僚ト協議ノ上直ニ小村ニ電訓シ  
テ清國政府ニ宣言セシムルニ朝鮮ノ内訌變亂屢起ルハ必  
竟其内政ノ治マラサルニ職由ス故ニ帝國政府ハ該國ニ於  
ケル利害ノ關係ノ密接ナル日清兩國カ其内政ノ改革ニ助  
力ヲ與フルノ必要アルヲ信シ嘗テ清國政府ニ提議スル所  
アリシモ清國政府ハ毅然之ヲ擯斥シ近日又貴國ニ駐在ス  
ル英國公使ハ日清兩國ニ對スル友誼ヲ重シ好意ヲ以テ居  
中周旋ノ勞ヲ取リ日清兩國ノ紛議ヲ調停セムト努メタル  
モ清國政府ハ依然尙ホ我國ノ軍隊ヲ朝鮮ヨリ撤去スヘシ



清國政府カ重キテ  
露國ノ仲裁ニ措キ  
タル事由

ト主張スルノ外何等ノ商議モ爲サ、ルハ則チ清國政府カ  
徒ニ事ヲ好ムモノニ非スシテ何ソヤ事務局既ニ此ニ至ル將  
來不測ノ變生スルアルモ日本政府ハ其責ニ任セサルヘシ  
トノ意ヲ以テセリ是レ清國政府ニ對スル日本政府ノ第二  
次絶交書ト謂フヘシ余カ大島公使ニ向ヒ英國ノ仲裁ハ失  
敗シタリ今ハ斷然タル處置ヲ施スノ必要アリ云々トノ電  
訓ヲ發シタルハ正ニ是レ此日ノ事ナリ

如何ニ表裏反覆常ナキ總理衙門王大臣輩ナレハトテ現ニ  
一旦英國公使ニ約言シタル事ヲ卒然健忘シタル如キ舉止  
アルハ實ニ不思議千萬ナル様ナレトモ熟其裡面ノ魂膽ヲ  
洞察スレハ彼等ハ後來ノ結果如何ヲ顧ス無遠慮ニモ北京  
ト天津トニ於テ別個ニ而モ殆ト同時ニ英露兩國代表者ト  
商議ヲ開キタリ而シテ彼等ハ最初ヨリ天津ニ於ケル露國  
公使ノ成功ニ倚信シ居タルノミナラス中心亦之ヲ切望シ  
居タルナルヘシ何トナレハ英國代表者カ朝鮮ノ内政改革

ニ關シ再ヒ日清兩國ノ間ニ會商スヘシトノ意見ヨリハ露  
國ノ勸告ニ係ル日清兩國カ同時ニ各自ノ軍隊ヲ朝鮮ヨリ  
撤去スヘシトノ說ノ方彼等ニ取テ無論都合好ケレハナリ  
然ルニ在東京露國公使「ヒトロツチ」カ撤兵ノ勸告ヲ日本  
政府ニ提出シタルハ六月卅日ニシテ日本政府カ穩ニ之ヲ  
謝絶シタルハ七月二日ナリ而シテ露國政府ノ意底如何ハ  
知ルヘカラサルモ兎ニ角日本ノ回答ニ對シ満足ヲ表シタ  
ルハ七月十三日ニ係ル故ニ七月九日ニ於テ小村臨時代理  
公使カ總理衙門王大臣ト會商セシ時期ニハ李鴻章モ總理  
衙門モ尙ホ十分ニ露國ノ強援ニ屬望シ居タルノミナラス  
天津ニ在ル露國公使カシ「伯爵」自身スラモ多分本國政  
府カ以テ如何ナル方針ニ出ツヘキヤヲ知ラス尙ホ頗ニ好  
餌ヲ投シテ李鴻章ヲ釣留メ居タル頃ナルヘシ事情果シテ  
此ノ如シトセハ總理衙門王大臣等カ一時英國公使ノ說ヲ  
容レタル如キ假面ヲ掩ヒ別ニ竊ニ待ツ所アリシハ亦已ム

英國政府再度ノ仲裁

ナ得サルコトナルヘシ元來清國政府ハ始ヨリ外交上必須ノ信義ヲ守ルコトヲ知ラス自家焦眉ノ急ヲ救フニ切ナルカ爲メ恰モ一女ニ向ヒ二婿ヲ贅招スル如キ拙劣ナル外交手段ヲ執リ終ニ自ラ孑々孤立ノ境界ニ陥ルヲ悟ラサリシハ他ノ碌々凡庸ノ流輩ハ姑ク問ハス經驗アリ識量アリト稱セラル、李鴻章ニシテ尙ホ之ヲ免レサリシハ惜ムニ餘リアルコトナリ

清國ハ其後露國カ日本ニ對スル舉動ヲ視テ龍頭蛇尾ノ憾ナキ能ハスシテ頗ル失望シタルヤ疑ナシ「オコンナル」ハ此機ヲ失ハス窃ニ其通譯官某ニ密旨ヲ授ケ天津ニ派遣シ李鴻章ト内議スル所アラシメタリ因テ李鴻章ハ復北京政府ニ再ヒ英國公使ノ仲裁ヲ頼ムヘキコトヲ懇懇シタルナルヘシ英國臨時代理公使「バゼット」ハ更ニ余ニ面會ヲ求メ在北京英國公使ノ電照ナリトテ清國政府ハ小村公使ノ本月十四日ノ照會ニ接シ頗ル憤激シタレトモ（小村ノ十四日ノ照會トハ即チ余カ十二日ニ小

右ニ對スル我政府ノ回答

村ニ發シタル電訓ニシテ小村カ之ヲ總理衙門ニ提出シタルハ十四日ナリ又彼等カ頗ル憤激シタリトハ右電訓ノ末文ニ清國政府カ徒ニ事ヲ好ムモノニ非スシテ何ソヤ事務局已ニ此ニ至ル將來不測ノ變生スルアルモ日本政府ハ其責ニ任セサルヘシト云ヒタル所ヲ指スナルヘシ

日本政府ニシテ尙ホ平和ニ意アラハ清國ハ必スシモ再ヒ談判ヲ開クノ望ナキニ非ス日本政府ノ決意如何ヲ知ラムト欲スト述ヘタリ余ハ此時既ニ朝鮮ノ事局大ニ切迫シ大島公使ハ韓廷ニ對シ最終的照會ヲ提出シ其目的ヲ遂クル爲メニハ或ハ兵力ヲ使用スヘク從テ在韓ノ日清兩軍ハ何時交戦スルヤモ計リ難キ形勢ナレハ固ヨリ清國ト優游轉俎ノ間ニ再ヒ會商スルノ暇ナキヲ知ルト雖モ去リトテ英國ニ對シ無碍ニ之ヲ拒絕セムハ流石ニ外交上ノ禮儀ヲ缺ク恐アレハ清國政府ニ於テ到底肯諾シ得ヘカラサル條件ヲ提起シ自然ニ之ヲ中止セシムルニ如カスト思考シタルニ由リ余ハ即チ「バゼット」ニ向ヒ朝鮮問題モ今ヤ大ニ其歩武ヲ進メ事務局決シテ昔日ノ比ニ非ス日本政府ハ最早嘗テ清國ト會商スヘシト約シタル條件ニ據ル能ハス故ニ假令清國政府カ朝鮮内政改革ノ

爲メ共同委員ヲ撰派スルニ至ルモ日本政府ガ既ニ今日マ  
 テ獨力ヲ以テ着手シタル事項ニ就テハ敢テ容喙セサルコ  
 トヲ約スヘシ而シテ朝鮮ノ形勢ヲシテ斯ク迄ニ切迫ニ至  
 ラシメタルハ畢竟清國政府カ陰險ノ手段ト因循ノ方法ト  
 ナ以テ諸事ヲ遲延セシメタルニ因ル故ニ我今回ノ提議ニ  
 對シ清國政府ハ本日ヨリ五日ヲ限リ適當ノ筋道ニ依リ其  
 諾否ヲ言フニ非サレハ日本政府ハ復之ト應接スル能ハス  
 且ツ若シ清國カ此際更ニ朝鮮ニ軍隊ヲ増派スルニ至ラハ  
 日本政府ハ直ニ之ヲ脅嚇ノ處置ト認ムヘシ清國政府果シ  
 テ此趣意ニ依リ日本ト會商セムト欲セハ日本政府敢テ之  
 ナ拒マサルヘシト言ヒ聞ケタリ斯ノ如キ切迫ナル要求ニ  
 對シ清國ノ如ク緩慢ニシテ疑念多キ政府カ固ヨリ輕諾ス  
 ル筈モナク遂ニ彼ヨリハ何等ノ回答ヲモ爲スニ至ラスシ  
 テ事全ク終了セリ然レトモ英國政府ハ右ノ日本政府カ清  
 國ヘ對スル回答ニ向ヒ默視スルヲ肯セズ即チ七月二十一

英國政府カ今日清國政府  
 對シテ提議スル筋道ニ依  
 リ其諾否ヲ言フニ非サレ  
 ハ日本政府ハ復之ト應接ス  
 ル能ハス且ツ若シ清國カ  
 此際更ニ朝鮮ニ軍隊ヲ増  
 派スルニ至ラハ日本政府ハ  
 直ニ之ヲ脅嚇ノ處置ト認  
 ムヘシ清國政府果シテ此  
 趣意ニ依リ日本ト會商セ  
 ムト欲セハ日本政府敢テ之  
 ナ拒マサルヘシト言ヒ聞  
 ケタリ斯ノ如キ切迫ナル  
 要求ニ對シ清國ノ如ク緩  
 慢ニシテ疑念多キ政府カ  
 固ヨリ輕諾スル筈モナク  
 遂ニ彼ヨリハ何等ノ回答  
 ヲモ爲スニ至ラスシテ事  
 全ク終了セリ然レトモ英  
 國政府ハ右ノ日本政府カ  
 清國ヘ對スル回答ニ向ヒ  
 默視スルヲ肯セズ即チ七  
 月二十一

日ヲ以テ英國外務大臣ハ其日本駐劄臨時代理公使ニ電訓  
 シ一ノ覺書ヲ日本政府ニ提出セシメタリ其概要ハ日本政  
 府カ今回清國政府ニ對スル要求ハ嘗テ日本政府カ談判ノ  
 基礎トスヘシト明言シタル所ニ矛盾シ且ツ其範圍ノ外ニ  
 出テタリ日本政府カ既ニ單獨ニ着手シタル事柄ト雖モ清  
 國政府ヲシテ毫モ容喙協議セシメスト云フハ實ニ天津條  
 約ノ精神ヲ度外視スルモノナリ因テ若シ日本政府カ斯ル  
 政略ヲ固執シ之カ爲メニ開戦スルニ至ラハ其結果ニ對シ  
 日本政府ハ其責ニ任スルノ外ナシトノ意ニシテ其外形ノ  
 嚴厲ナルハ殆ト露國政府六月三十日ノ照會ト差異ナキ如  
 クナレトモ當時ノ事態ハ露國政府カ最終的公文ヲ提出シ  
 タル時ト同シカラサルノミナラス余ハ當初ヨリ英國政府  
 ノ決心ハ露國政府ノ決心ヨリモ堅カラサルヲ信スヘキ理  
 由ヲ有シ居タレハ直ニ翌廿二日ヲ以テ同國臨時代理公使  
 ニ一ノ覺書ヲ手交シ之ヲ本國政府ニ發電セムコトヲ求メ

タリ其概要ハ日本政府カ清國政府ニ要求スル所ハ決シテ英國外務大臣ヨリ詰問セラル、如キモノニ非ス今回日本政府ノ要求ハ嘗テ談判ノ基礎トスヘシト明言シタルノ範圍ニ出テタルコトナシ何トナレハ清國ノ提議ハ既ニ日本政府カ曾テ提出シタル條件ニ比シ甚々相違ノ廉少カラス且ツ天津條約ハ單ニ日清兩國カ軍隊ヲ朝鮮ニ派出スルノ手續ヲ規定スルノ外他ニ何等ノ約束アルコトナシ故ニ若シ英國政府ニ於テ今回ノ葛藤ヨリ生スル結果ヲ以テ獨リ日本政府其責ニ任スヘシト云フモ日本政府ハ敢テ之ニ當ラスト信ス蓋シ最初ニ倘シ清國政府カ日本ノ提議ヲ容ル、カ又ハ清國駐劄英國公使ノ仲裁セラレシ時ニ日本政府ト再ヒ會商ヲ開キタラハ事体斯ノ如ク重大ニ至ラザリシナルヘシトイフニ在リ此回答ニ對シテハ英國政府ハ復何等ノ異言モナク俗ニ所謂泣寝入ノ姿トナリテ止ミタリ茲ニ單簡ニ當時ノ事情ヲ追懷シ何故ニ英露兩國政府カ日

本ニ對スル照會ハ外形殆ト同一ナルニ日本政府カ之ニ對シ寬猛稍其度ヲ異ニセル回答ヲ爲シタルヤト云フニ露國政府ノ意底ハ最初ヨリ甚々危險ナリト推量セラレ又彼ハ一弛一張ノ外交政略ヲ執ルモ其極意ハ何等ノ手段ヲ施スモ自己ノ利害ニ關スル事項ニ就テハ決シテ放棄セストノ決心ヲ抱クモノナリト判斷セラレタルモ英國政府ハ唯東洋ノ平和ノ破裂セムコトヲ恐レ熱心ニ之ヲ調停スルコトニ盡力スルノミニテ若シ自家ノ言分相立タサレハ兵力ヲ以テ干涉スヘシト迄ノ決意ヲ有スルモノ、如クニ見エサリシ是レ單ニ余輩カ想像ニ非ス當時ニ現出シタル事實モ亦之ヲ証明スルモノアリ即チ余カ七月廿二日ヲ以テ彼ノ英國ノ最終的照會トモ名クヘキ嚴厲ナル公文ニ對シ日本政府ノ答案トシテ覺書ヲ發シタルノ翌日即チ同月二十三日ニ於テ「バセツト」ハ更ニ本國政府ノ訓令ナリト稱シ向後日清兩國ノ間ニ開戦スルニ至ルモ清國上海ハ英國利益ノ

英國政府ヨリ日清  
兩國ノ軍隊カ各  
朝鮮ヲ占領シ徐ニ  
兩國ノ協議ヲ爲ス  
ヘシトノ勸告

中心ナルヲ以テ日本政府ハ同港及其近傍ニ於テ戰爭的運  
動ヲ爲サストノ約諾ヲ得置キタシト申越シタリ是レ英國  
政府カ徹頭徹尾何等ノ手段ニ由ルモ東洋ノ平和ヲ維持セ  
ムトスルノ決心ヲ有スト云ハムヨリハ寧ロ日清兩國ノ交  
戰ハ到底避クヘカラス亦之ヲ制止シ能ハストノ觀念アル  
ノ一証トシテ視ルヘシ而シテ日本政府ハ無論ニ英國ノ請  
求ヲ諾シタリ又七月二十二日在英國公使青木子爵ヨリ英  
國外務大臣ハ日清兩國ノ軍隊カ各朝鮮ヲ占領シ其間徐ニ  
兩國ノ協議ヲ爲スヘシトノ英國ノ提議ニ對シ清國政府ハ  
既ニ之ニ同意シタリ因テ日本政府モ此ノ主義ニ基キ善後  
ノ策ヲ講セラルヘシト勸告セシ旨ヲ電稟シタリ(余ハ小村  
ニ電訓レ所謂共同占領トハ如何ナル意味ナルヤ在北京、オコ  
ンナル)ハ例ヘハ日本兵ハ京城ヲ去リ或ル南部地方ヲ一時占領シ清軍ハ牙山ヨリ平壤ニ移  
リ以テ目下ノ衝突ヲ避ケ假スニ談判ノ時日ヲ以テセムトスルノ意ナリト答ヘタリ此共同占  
領ト云フ英國ノ提議余ハ今ニ至ルマデ其何ノ意味ナルヲ解スル能ハサレトモ余カ此提議ニ  
接シタル時ハ大島公使カ既ニ朝鮮ノ京城ヲ圍ミ追テ該國ヲシテ我要求ヲ容レシメタルノ日  
ナルヲ以テ固ヨリ此等ノ協議ニ干預スルノ道ナク從テ別ニ日本政府ヨリハ何等ノ難答ヲ與  
ヘサル内ニ日清ノ)抑、英國政府ハ一旦我政府ニ對シ最終的嚴厲ノ

公文ヲ發シタル前後ニ於テ更ニ上海ノ中立ヲ請求シ又暖  
昧ナル共同占領ヲ勸告シ來ルヲ以テ觀ルモ彼ハ其中心ニ  
於テ已ムヲ得サレハ斷然高手的處分ニ出ツヘシトノ決意  
アリシトハ思ハレサリシ是ヲ以テ露國政府ガ不測ノ大志  
ヲ抱キ居ル如ク見ユルモノニ比スレハ我政府ハ兩者ニ對  
シ自ラ其輕重ヲ酌量スル所ナキ能ハサルナリ之ヲ約言ス  
レハ露國ノ意思ハ最初ヨリ一定不動ナルカ如ク英國ノ意  
思ハ臨機應變ナルカ如シ其後英國ニテ發行セシ「ブラック、  
ウード」雜誌中ニ清國ノ死勢力、露國ノ潛勢力、及日本ノ活勢  
力カ新奇ナル演藝ヲ合奏亂舞スル間ニ歐洲諸強國ヲ驅テ  
東洋ノ舞臺ニ引出シ來リタリトノ一節アリタルハ稍其真  
相ヲ穿チタルモノナリ余ヨリ之ヲ音ヘハ日清兩國カ此悲  
劇ノ舞臺ニ演藝スル間ニ露國ハ始終舞臺ノ一隅ニ隱見シ  
一個ノ演技者トシテ動作シタルモ英國ハ舞臺ノ外ニ在テ  
演藝ニ對シ種々ノ批評ヲ試タル熱心ナル看客タルニ過キ



九十二  
サリシ  
爾來英露政府ハ孰レモ東洋ノ局面ニ向ヒ飛耳長目變勢ノ  
進行ヲ注視スルニ怠ラサリシ而シテ細ニ其内情ヲ云ヘハ  
露國ハ苟モ因テ以テ自國ノ利益ヲ進張スルカ然ラサルモ  
利益ノ障害トナルヘキモノヲ防制セムトスル爲メニハ竟  
ニ積極的手段ヲ執ルヲ辭セサルモ英國ハ其東洋ノ商利ヲ  
擾亂セラレムコトヲ恐ルノ餘リ時機ノ許スニ於テハ日清  
兩國ヲシテ平和ヲ恢復セシメムト努力シタレトモ果シテ  
露國ノ如キ大膽ナル強手方畧ヲ實行スルノ決心アリトモ  
見エズ然シ此兩國ハ兎モ角モ日清交戦ノ進行中ニ於テ何  
ノ時何ノ邊ニ各其目的ヲ達スヘキ機會アルカト窺ヒ居タ  
ルニ相違ナク其我國ニ對スル干涉的行爲ハ兩者稍其趣ヲ  
異ニシタレトモ畢竟自家特異ノ利益ヲ保護セムト欲シタ  
ルノ點ニ至テハ一ナリト謂フヘシ爾來我國ト露英兩國ト  
ノ間ニ生シタル關係ハ以上述フル所ニ止マラサリシト雖

モ一ノ關係ヲ生スルニハ必ス同時ニ他ノ事項ト關聯スル  
ヲ以テ各其章ニ讓リ豫メ茲ニ詳述セズ

米國ノ忠告

米國モ亦他ノ列國ト均レク朝鮮政府ヨリ該國ノ内亂既ニ  
鎮定シタルニ由リ日清兩國ノ軍隊ヲ撤去セシムル爲メ援  
助ヲ乞ハレタルノ一國ナルヲ以テ七月九日ニ於テ米國政  
府ハ本邦駐劄同國公使「エドウキンダン」ニ電訓シ我政府ニ  
忠告スル所アラシメタリ其概要ハ朝鮮ノ變亂已ニ鎮定シ  
タルニ拘ラス日本政府カ清國ト均シク其軍隊ヲ該國ヨリ  
撤回スルコトヲ拒ミ且ツ該國ノ内政ニ對シ急激ノ改革ヲ  
施サムトスルハ米國政府ノ深ク遺憾トスル所ナリ米國政  
府ハ日本及朝鮮兩國ニ對シ篤ク友誼ヲ抱クカ故ニ日本政  
府カ朝鮮ノ獨立并ニ主權ヲ重セラレムコトヲ希望ス若シ  
日本ニシテ無名ノ師ヲ興シ微弱ニシテ防禦ニ堪ヘサル鄰  
國ヲ兵火ノ修羅場タラシムルニ至ラハ合衆國ノ大統領ハ

米國ノ忠告

右ニ對スル我政府  
ノ回答

痛ク惋惜スヘシトイフニ在リ米國ハ從來我國ニ對シ最モ  
友誼厚ク最モ好意ヲ抱キ居ル國ニシテ特ニ彼國固有ノ政  
略ヨリ云フモ極東ノ方域ニ發起シタル事局ニ容喙スルヲ  
好ムモノニ非ス畢竟人間普通ノ恒心ナル平和ノ希望ト朝  
鮮ノ懇請ヲ拒ミ難カリシトノ外何等ノ意思ヲ有セサルモ  
ノタルハ明白ナリ故ニ余ハ米國公使ニ對シ朝鮮現在ノ事  
情ヲ詳述シ其内亂ハ外面鎮定シタル如キモ禍源未タ全ク  
排除セス殊ニ清國ハ譎詐陰險ナル手段ニ出ツルヲ常トス  
ルヲ思ヘハ將來ノ形勢如何ヲ究視セス日本政府カ容易ニ  
其軍隊ヲ撤去スルハ却テ東洋ノ平和ヲ保護スル所以ニ非  
サルノ意見ヲ述ヘ米國公使モ亦既ニ日清韓三國現在ノ形  
勢ヲ目撃會得シ居ルコトナレハ直ニ余カ説テ是認シ之ヲ  
本國ニ電稟シタリト云フ今回ノ事件ニ就キ米國カ稍干涉  
的容態ヲ顯シタルハ實ニ此一事ニ止マリ此後彼國カ懇切  
ニ日清兩國ノ間ニ立チ平和ヲ恢復スヘキ媒介ノ勞ヲ取り

タルハ尙ホ後章ニ記述スヘシ

他ノ列國ノ關係

他ノ列國ハ前三國ニ於ケル如ク我政府ニ向ヒ公然ノ調停  
ヲ試タルモノナシ但シ伊國公使ハ始終英國公使ヲ援助シ  
余ニ向ヒ勸告ヲ試タルコトアリ又獨佛兩公使ハ最初ノ頃  
ハ表向ニハ日清兩國ノ紛議速ニ妥協スルヲ以テ東洋ノ平  
和ヲ維持スル爲メニ得策ナルヘシト云ヒタレトモ余ト私  
見ノ時ニハ清國古來ノ迷夢ヲ覺醒セシムルニハ到底何人  
カ之ニ一大打擊ヲ加ヘサルヘカラスト云ヒ暗ニ我國ニ傾  
意スル如キ風ヲ顯シ特ニ佛國公使アルマンハ將來日佛同  
盟以テ東洋大局ノ平和ヲ保持スルノ必要アルヘシト説キ  
タルコトアリ後日此兩國カ俄ニ豹變シテ露國ノ同盟トナ  
リ遼東半島ノ問題ヲ提起シ來リシ迄ハ兎モ角モ日本ノ好  
友タルノ地位ヲ占メ居タリ

日清兩國ノ間覺端既ニ啓ケ交戦スルニ及ヒ余ハ其事ヲ日

本駐在各國代表者ニ通知シタリシニ歐米各國ノ中英獨伊、米、蘭、西、葡、瑞、典、諸國ハ皆局外中立タルヘキコトヲ聲明シ、露、佛、奧、ハ公然中立ヲ布告セサルモ事實上之ヲ守ルノ意志ナリト照會シ來レリ

第八章 六月二十二日以後開戦ニ至ル間ノ李鴻章ノ位置

李鴻章ハ六月廿二日附ニテ余ヨリ汪鳳藻ニ與ヘタル公文ニ接シ始メテ我政府ノ決心ヲ知リ其虛喝手段ニ依リ日韓兩國ヲ脅嚇スルノ無効ナルヲ覺知シタルモノニヤ彼ハ少シク其政畧ヲ變更シ一方ニハ外交上ノ方策トシテ頻ニ歐米強國ニ依頼シ調停周旋ノ勞ヲ執ルコトヲ乞ヒ他ノ一方ニハ軍事上ノ計畧トシテ一層優勢ナル軍兵ヲ朝鮮ニ増派セムトセリ李鴻章カ此軍事上ノ計畧ハ果シテ彼ノ虛喝手段ヲ變シテ斷然最後ノ勝敗ヲ決スヘシトノ意思ヲ確定シタルヤ尙ホ當初ノ計畫ノ如ク聲ト形トヲ以テ我國ヲ威嚇

スル爲メ殊更ニ外形ヲ張大ニセムト欲シタルヤ判然推量シ難シト雖モ昨年六七月ノ交ニ於テ李鴻章ハ更ニ朝鮮ヘ大兵ヲ増派セムコトヲ北京政府ニ建言シタルハ事實ナリ彼ハ即チ北京政府ト牒シ合セ英、露、兩公使ニ向ヒ各其調停ノ勞ヲ執ラムコトヲ依頼シタルノミナラス獨佛、米、各公使ニモ均シク居中周旋セムコトヲ依頼シタリ而シテ彼等ハ此ノ如キ依頼カ徒ニ歐洲諸強國ノ間ニ存スル相互ノ猜忌心ト功利心トヲ挑撥シ計圖決シテ一致ニ出テ却テ相互ニ之ヲ妨障スルニ至ルノ結果ヲ生スルヲ知ラサリシ故ニ當時ニ在テ獨佛、米、ノ如キハ殆ト誠實ニ清國ノ要求ニ應シタルモノナク唯露ト英トハ其東洋ニ於ケル利害特ニ著大ナル國柄丈ニ稍進ムテ日清兩國ノ間ニ立チ調停スルコトヲ努メタレトモ是トテモ各自家ノ便宜ヲ計ルノ外決シテ一致ノ運動ヲ爲シタル跡ナク竟ニ各其干涉ノ手ヲ引クニ至レリ然レトモ清國政府特ニ李鴻章ハ切ニ此外援ニ屬望